

レーラインの鍵盤楽器教本研究 4

— 運指教程についての研究 1 —

小野 亮 祐

(2007年10月4日受理)

Eine Studie über Löhleins Klavierschule 4

— Über den Fingersetzungsteil 1—

Ryosuke Ono

Zusammenfassung. Ich mache von jeher Studien über G. S. Löhleins Klavierschule. Sie erschien 1765 bis 1848 und wurde insgesamt 8 mal erweitert und vermehrt. In dieser Studie mache ich die Änderung des Fingersetzungsteils von der 1. Auflage (1765) bis zur 6. Auflage (1804) klar. Von der 1. bis zur 5. Auflage funktioniert der Fingersetzungsteil nur als Erklärung der Regel und des Begriffs von der Fingersetzung und überlässt den in der Klavierschule beiliegenden Übungsstücken den praktischen Übungsteil der Fingersetzung. Im Übungsteil kann man nicht nur die Fingersetzung, sondern gleichzeitig andere Sache über die Musik lernen. Aber in der 6. Auflage konzentriert der Fingersetzungsteil mit den vielen Übungsstücken den Ziel auf nur der praktischen Fingersetzungsübung.

Stichwörter: Fingersetzung, Klavierschule, G. S. Löhlein, Übungsstück

キーワード: 運指, 鍵盤楽器教本, レーライン, 練習曲

はじめに

本研究は筆者が継続的に行っているレーラインG. S. Löhleinの鍵盤楽器教本研究の一環である。この教本は1765年に初版が出版された後、8回改訂重版が行われ、最後の第9版が1848年に出版された長寿鍵盤楽器教本であった。この点に着目し、筆者はレーラインの教本の改訂に伴う変化の研究を継続している。前回¹⁾は装飾音教程についてであったが、本論では初版から第6版までの運指教程を検討したい。

本論の考察目的は、教本における運指の教程の取り扱いである。よってそれぞれの版の細かな運指の比較はせず、運指教程の内容構成とその他の章との関連を比較検討する。

1. 初版から第4版までの運指教程

レーラインの教本の初版から第4版までの運指教程

は大きく改訂されずほぼ同一で、第7章として16ページの下方から19ページ上方までを占めている。各段落には§番号が打たれ、その総数は6つである。各§ごとの概要を以下に示す。

§ 1: 運指の定義「運指とは書き記された音を快適で明瞭な方法で打鍵し聴覚にも繊細に聞きやすくするための指の良い使用のことである」。

§ 2: 運指教程の必要性。当時の鍵盤楽器教授における運指教程軽視への批判。

§ 3: 運指教程を軽視した鍵盤楽器教授の結果引き起こされる悪影響について。

§ 4²⁾: 運指を正しく学ばないと正しい演奏は出来ない。運指の規則を以下の通り3つ挙げる。

- 1) 親指と小指を黒鍵の打鍵に使用することの原則禁止。
- 2) 手の形(親指, 小指以外の指を曲げて5本の指先を直線にする)
- 3) 音階的進行での親指を軸とした指の交差

§ 5 : § 4の規則をふまえた3つの譜例(図1)とその習得方法(運指練習は、次章「旋律と演奏につ

いて」の内容を理解し、その章に掲載されている練習曲の中でするように指示)。

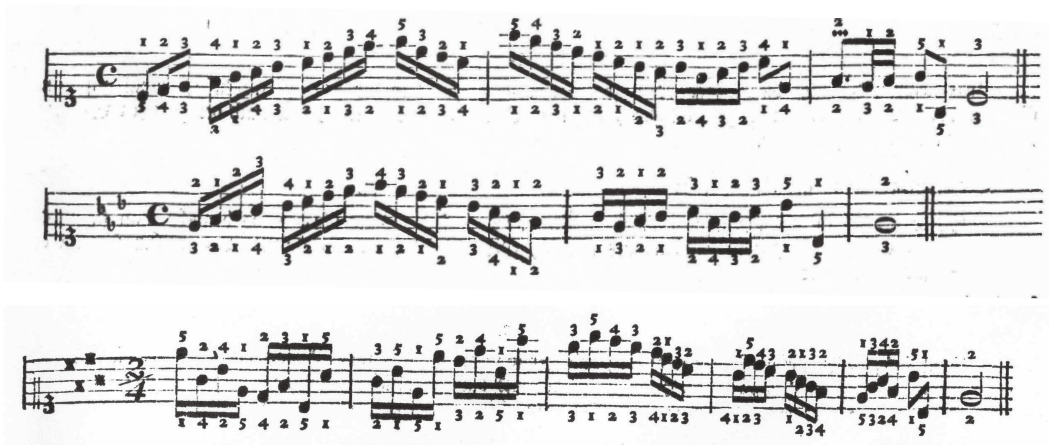


図1 第4版§5に付された3つの譜例

以上から導きだされる初版から第4版の運指教程の意図は、以下のとおりである。

- ・現状批判から運指の重要性を示すこと。
- ・規則だけで運指を習得させず、実際の楽曲で習得させること。
- ・親指と小指の使用を重視させること。

2. 第5版の運指教程

初めて大きな改訂が行われるのは、この1791年発行の第5版である。元著者レーラインはすでに1781年に死去し、代わってレーラインの弟子であるヴィトハウアー J. G. Witthauer が改訂を行っている。

第5版での運指教程の章は第9章で、33ページから46ページまでを占める。初版から第4版までと同様、各段落には§番号が付けられ、その総数は6つである³⁾。以下にその概要を示す。

§ 1 : 良い運指の定義「良い運指とは、知識と熟練を備えて、必要とされるテンポで熟練した指の使用を通じて、鍵盤楽曲を、快適に、明確かつスラーでも演奏できることである」

§ 2 : 運指法に必要とされる、手や腕の形の規則。

- 1) 親指と小指を黒鍵にもちいないこと。
- 2) 長い指を曲げて5本の指先が直線に並ぶこと。緊張させないこと。
- 3) 指の間はある程度の間隔を開けること。親指を常に使える状態にしておくために、鍵盤の上に持ってきておくこと。
- 4) 腕の位置

5) 手の高さについて

§ 3 : 指の交差について

§ 4 : 鍵盤楽曲の運指は音階的進行と跳躍進行の組み合わせであることから、次の二つの主要課題が導きだされる。

- 1) 音階的進行における運指
- 2) 和音の運指

これに伴って音階的練習が譜例(図2)として掲載される。

§ 5 : 各調の3和音とその転開形の運指、分散和音の時の運指。これらの譜例が掲載される(図3)。コラル演奏のすすめ。

§ 6 : 上記以外で様々な場合での運指規則が譜例付きで示される。

- ・異なる音を続けて同一の指で弾くことの禁止。ただしスタッカートの場合、黒鍵から直近の白鍵への移動、3度の平行の時はまだ許される(図4)。
- ・連続する3度の跳躍の運指
- ・同一音が連続するときは異なる指で打鍵(図4)。
- ・一つの音を保続しながら指を変える方法。
- ・音階的進行での指の省略。
- ・ダブルシュラクでの運指。
- ・指の交差が必要ない場合の注意。
- ・半音階進行での運指。
- ・上記であげた以外の運指は次章の練習曲で示される。



図2 第5版 §4における音階の運指の1例



図3 第5版 §4における和音の運指の1例



図4 第5版 §6における譜例の1例

以上の内容から、レーライン4版までと第5版を比較して以下のことが指摘される。

- 1) 第4版までの定義は運指そのものの定義であったが、第5版は良い運指の定義となっている。
- 2) 第4版までは運指を習得することの重要性が強調されていたが、第5版ではあまりなされない。
- 3) あげられる運指の規則は第5版の方が多くなっている。第4版までは指の動きについてのみが述べられていたが、第5版ではそれと併せて必要な腕の位置や手の高さも述べられている。
- 4) 第5版では規則をふまえた上での運指の主要課題が豊富な譜例とともに明示され、その練習を本章でさせようとしている。主要課題は音階的進行と跳躍（和声）での運指の2種類である。第4版までの運指教程の章には、主要課題の提示や練習をさせる意図はない。
- 5) 第5版では主要課題以外の運指は個別の事項として運指規則で取り扱われ、結果として第4版より細かく述べられている。

- 6) ただし、最終的には教本に付けられた練習曲で運指の実践的な練習をすることを指示している点は第5版まで一貫している。

この比較をまとめると以下の点が指摘される。

- ・第4版までの運指教程の章は、運指練習をさせる章ではなく、運指の定義・必要性・規則を説明して例示する部分であったといえる。
- ・それに対して第5版では、運指の習得は必須であり定義にあった「良い」運指を習得することを目的としている。そのため、学習者にもわかりやすいように、習得すべき課題を大きく二つに分け、豊富な譜例によって例示し、練習をある程度させることを目的としている

以上、運指教程の章を第4版までと第5版とで比較検討を行った。両者に異なる点がある一方、運指教程の章の次章に掲載される練習曲と密接に結びついていることが共通点として指摘される。そこで次節では第

6版の考察の前に、この両者の版における練習曲の概要をまとめ、運指教程との関係を検討する。

3. 初版から第4版までと第5版の練習曲

初版から第4版までの練習曲はほとんど改訂されずほぼ同一で、第8章「旋律と演奏について」の章に含まれる。第5版では第10章「演奏について」の章に含

まれる。このように演奏についての章に練習曲が含まれるケースは当時の他の教本にあまりなく、例えばエマヌエル・バッハの「正しい鍵盤楽器奏法試論」(1756年)⁴⁾では付録に含まれ、マールブルクの「鍵盤楽器奏法への手引き」(1754年)⁵⁾では、運指教程の章のまとめとして巻末にまとめられている。

第4版までと第5版に含まれる各練習曲の特徴をまとめたのが以下の表1、2である。

表1 初版から第4版につけられた練習曲の一覧表。網掛けは第5版にも引き継がれた曲。

曲	発想記号・題目	拍子	調	ページ	小節数	形式	運指上の特徴	装飾音
1	Langsam	C	C	20	7	特になし	2分音符→4分音符→8分音符→16分音符→和音、指の交差なし	なし
2	Menuet	4分の3	C	21	8+8	メヌエット2部形式(それぞれ繰り返し)	4分音符と8分音符、若干左手に3度の平行	前打音付きダブルシュラク
3	Poco Vivace	8分の6	C	22	8+8	2部形式(それぞれ繰り返し)	3度平行、6度平行	トリル
4	Praeludium	C	C	23	5	分散和音によるプレリュード	3和音のアルペジオ、和音	なし
5	Baletto	4分の2	F	24	8+8	2部形式(それぞれ繰り返し)	多声的運指(2声のポリフォニー)	ダブルシュラク、前打音
6	Menuet	4分の3	F	25	8+8	メヌエット2部形式(それぞれ繰り返し)	指の省略、3連符が混じる	前打音付きダブルシュラク
7	Gigue	8分の6	F	26	8+8	ジグ2部形式(それぞれ繰り返し)	3度平行、3連符の動き	前打音(多声)、トリル
8	Menuet	4分の3	F	27	8+8	メヌエット2部形式(それぞれ繰り返し)	同一音の連続	下方付属音に始まるトリル、モルデント
9	Polonoise	4分の3	D	28	4+4	2部形式(それぞれ繰り返し)	3度の平行	前打音(3度平行の)
10	Passaggio	C	G	28	3	特になし(音階進行パッセージ)	音階的進行での指の交差(右手のみ)	なし
11	Allegro	4分の2	G	29	8+8	2部形式(それぞれ繰り返し)	音階的進行での指の交差(右手のみ)とその他の運指の混合	下方付属音に始まるトリル、前打音付きモルデント・トリル
12	Arioso	4分の2	B	30	12+18	2部形式(それぞれ繰り返し)	3度の平行、分散和音、指の交差	ダブルシュラク、後打音付きトリル
13	Polonoise	4分の3	g	32	4+6	2部形式(それぞれ繰り返し)	3度の平行の跳躍、指の交差	前打音
14	Menuet	4分の3	Es	33	8+8	2部形式(それぞれ繰り返し)	跳躍音型、3度の平行、指の交差	前打音
15	Polonoise	4分の3	c	34	4+6	2部形式(それぞれ繰り返し)	指の交差(跳躍音程での)、オクターブの跳躍の連続(ファンタジヤ的)	ダブルシュラク、(多声)前打音
16	Tempo di Menuetto	4分の3	C	35	16+30	2部形式(それぞれ繰り返し)	分散和音、跳躍	前打音付きダブルシュラク付きトリル
17	Divertimento Moderato	C	A	38	14+22	2部形式(それぞれ繰り返し)	スタッカート、3度平行	前打音付きダブルシュラク付きトリル
18	Polonoise	4分の3	A	43	10+20	2部形式(それぞれ繰り返し)	前打音付き平行音程	前打音(平行音程)
19	Marche	C	D	46	14+18	2部形式(それぞれ繰り返し)	左手の早い音階的進行(交差なし)	ダブルシュラク付きトリル
20	Rigadon	2分の2	A	48	8+15	この後のMinoreと共に複合2部形式(それぞれ繰り返し)	ポリフォニー	2重前打音
21	Minore	2分の2	a	50	8+16	2部形式(それぞれ繰り返し) Da capoして前のRigadonに戻る	ポリフォニー	ダブルシュラク付きトリル
22	Arietta con Variazioni	4分の2	A	52-61	8+12	テーマ(アリエッタ)+8つの変奏曲	急速な指の交差、分散和音	ダブルシュラク、前打音、トリル、ダブルシュラク付きトリル、下方付属音付きトリル

表2 第5版につけられた練習曲の一覧表。網掛けは第4版から引き継がれた曲で（ ）内は第4版での番号。

曲	発想記号・題目	拍子	調	ページ	小節数	形式	運指上の特徴	装飾音
1	Andantino	4分の2	G	51	4+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	手の交差を含む音階的進行	なし
2	Andante	4分の4	C	52	8	特になし	音階的進行と跳躍の組み合わせ音型	トリル
3	Moderato	2分の2	F	52	5	特になし	左手の音階的進行、右手と左手の指の交差	なし
4	Allegretto	8分の3	F	53	8	特になし	左手の分散和音・音階的進行・オクターブの跳躍	トリル
5	Gavotte	2分の2	a	53	4+4	2部形式ガヴォット（それぞれ繰り返し）	左手と右手の独立、指の交差	なし
6	Allegretto	8分の6	G	54	4+4	2部形式（繰り返しなし）	メロディの音階的進行	モルデント
7	Minuetto	4分の3	D	54	4+4	2部形式（それぞれ繰り返し）	オクターブ跳躍	短前打音、長前打音
8	Allegretto	8分の6	F	55	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	様々な跳躍音程の連続	なし
9	Allegretto	4分の2	B	55	8	次の Minore を中間部とする3部形式	音階的進行と跳躍、スタッカート	なし
10	Minore	4分の2	g	56	8	Da Capo を伴って前の Allegro に戻る	指の交差（音階）	前打音付きトリル
11	Tempo di Minuetto con spirito	4分の3	A	56	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	素早い音階的進行、3度の平行、和音のスタッカート	ダブルシュラク付きトリル
12	Poco vivace e cantabile	4分の2	G	57	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	付点（ダブルシュラク付き）	付点音符の直後のダブルシュラク
13	Andante grazioso	4分の2	F	58	8+8+8	ダ・カーボ形式	跳躍（分散和音）	付点音符の直後のダブルシュラク、モルデント
14	Arioso. Poco Adagio	4分の3	E	59	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	指の交差を伴わない音型が多出	二重前打音
15	Allegretto	4分の3	a	60	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	指の交差を伴わない音型が多出	前打音付きダブルシュラク
16	Allegro	4分の2	Es	61	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	スケール練習の連続	なし
17	Moderato e graziosi	4分の4	G	62	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	付点リズムの平行音程	平行前打音付きダブルシュラク付きトリル
18	Poco Adagio	4分の2	Es	63	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	高い音域での左手伴奏	二重前打音、ダブルシュラク、前打音
19	Allegro con spirito	4分の4	A	64	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	早いスケール練習（右左とも）	トリル
20	Poco vivace (3)	8分の6	C	65	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	早い3度・6度の平行	トリル
21	Minuetto (6)	4分の3	F	66	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	指の省略、3連符が混じる	前打音付きダブルシュラク
22	Allegro (10)	4分の3	G	67	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	音階、跳躍（3度が多い）	前打音付きダブルシュラク付きトリル
23	Minuetto (8)	4分の3	d	68	8+8	2部形式（それぞれ繰り返し）	同一音の連続	下方付属音に始まるトリル、モルデント
24	Gigue (7)	8分の6	F	69	8+8	ジグ2部形式（それぞれ繰り返しあり）	3度平行、3連符の動き	前打音（多声）、トリル
25	Polonoise	4分の3	D	70	4+4	2部形式（それぞれ繰り返し）	跳躍（分散和音を多用）	なし

26	Arioso Allegretto (12)	4分の2	B	71	12+18	2部形式（それぞれ繰り返し）	3度の平行、分散和音、指の交差	ドッペルシュラク、後打音付きトリル
27	Alla Polacca (15)	4分の3	c	73	4+6	2部形式（それぞれ繰り返し）	指の交差（跳躍音程での）、オクターブの跳躍の連続（ファンタジヤ的）	ドッペルシュラク、（多声）前打音
28	Tempo di Minuetto (16)	4分の3	C	74	16+30	2部形式（それぞれ繰り返し）	分散和音、跳躍	前打音付きドッペルシュラク付きトリル
29	Rigaudon. Vivace (20)	2分の2	A	76	8+15	この後のMinoreと共に複合2部形式（それぞれ繰り返し）	ポリフォニック	2重前打音
30	Minors (21)	2分の2	a	78	8+16	2部形式（それぞれ繰り返しあり）Da capoして前のRigadonに戻る	ポリフォニック	ドッペルシュラク付きトリル
31	Alla Polacca (18)	4分の3	A	79	10+20	2部形式（それぞれ繰り返し）	前打音付き平行音程	前打音（平行音程）

付された題名からは第4版までは舞曲を中心に編纂されていることがわかる。第5版では19曲目まで舞曲がほとんど出てこない。形式の点では繰り返し付きの2部形式が多く、ダ・カーポ形式も散見される。第4版までには最後に比較的長い変奏曲が見られるのが特徴であるが、第5版にはこれほど長い曲は見られない。いくらかの違いは有しつつも、初版から第5版までの練習曲はある一定の性格と形式を有する一般的な楽曲の体裁を取っているといえよう。

調号についても初めは1つないし0の調から始まり漸次調号が増えていく傾向にあるが、多くともシャープ、フラット共に3つを超えない範囲である事は初版から第5版まで共通している。

曲の長さの点では、いずれの版も初めは8+8が多いが、第4版までは12曲目と16曲目から急激に小節数が増える。それに対し第5版は全31曲中25曲まではおおむね8+8を超えない。また、第4版までの練習曲のうち11曲を第5版は引き継いでいるが（表の中の網掛け部分が該当）、そのうち6曲はその長さの範囲で選ばれており、曲の長さに慎重に配慮したものと思われる。

装飾音の点ではいずれの版も通常の曲の中に現れる装飾音の実施を練習させるようになっていく。

運指上の点では、各曲は一つの運指に特化されたものではなく、むしろ様々な運指を混合させたものである。ただし指の交差は、第4版までは右手に限り第10曲目以降にのみ現れ、左手の指の交差は最後まで出現しない。それに対して第5版では第1曲で右手の指の交差が、第3曲では左・右手共に現れている。この差は、第4版までが運指練習を練習曲で初めて練習を行わせるのに対し、第5版ではすでに運指教程の章で音階練習などが練習済みであることによると思われる。

曲の順序・構成の方針について第4版まではその序文において「段階的に難しくなっていくようにした小品が特別に付けられている」⁶⁾と述べられている通り漸次的な難化を計っている。第5版では練習曲の直前の説明⁷⁾に「この作品の使用は現れる順番によること」、「初心者へ配慮」と述べていることから難化させていくか別にしても難易度の優しい初心者用のものから並べていると考えられる。

また、第5版の改訂者ヴィトハウアーは序文において第4版までのレーラインの手による練習曲は難しく初心者にあわない⁸⁾と批判し、第5版の小品は初心者へ配慮において全く単純で簡単な音階や和音から作られていることが練習曲の前の説明に述べられている⁹⁾。その例として練習曲の第1曲目を取りあげる(図5)。この曲は、運指の点から見ると

- 1) 上行音階的進行：1 2 3 4, 2 3 4 5
- 2) 下行音階的進行：4 3 2 1, 5 4 3 2
- 3) 指の交差：3 2 1 3（下行）
- 4) 和音（終止）：左手の跳躍
- 5) 3度の同時の打鍵

というごく限られたパターンからなっている。このように第5版の練習曲には運指パターンの組み合わせで練習曲が構成されている。この方法は、第5版の運指教程の章の特徴としてあげた運指パターンで2種類（音階的進行と和声）に区分する方法とも共通すると思われる。よって第5版の練習曲の順序は第4版までの難易度段階という方針ではなく、初心者へ配慮しつつ限られた運指パターンを1曲ごとに修得させる方針によっていると考えられる。



図5 第5版の練習曲1曲目 Andantino

4. 第6版の運指教程について

第6版は1804年に出版された。改訂者は再び変わりミュラー A.E.Müllerである。

第5版までと同様段落ごとに§番号が付けられており、それが3つ含まれて p.47から p.294までを占めている。§3には800曲あまりの練習曲が含まれていて、これが p.52から p.294を占めている。つまり、第6版では練習曲が運指教程の章に含まれ、教本全体で372ページあるうちの3分の2以上を練習曲が占めている。以下§ごとの要約を記す。

§1 運指教程が示すものは、いかにして鍵盤楽器の諸音を、あらゆる隣り合う(音の)関係において、またあらゆるテンポや強さにおいても、等しく明瞭にそして簡単に快適に奏でるか、ということである。

§2 運指規則が示される。以下本文中の区分に沿ってまとめる。演奏時の姿勢については序論でまとめてある¹⁰⁾。

- a) 同じ鍵盤を連続して打鍵するときは異なる指を使う。
- b) オクターブなどの大きな音程の跳躍進行の時のみ黒鍵で親指が使える。
- c) 続けて同じ指で打鍵してはならない。ただし、平行音程の連続では許される。
- d) 指の交差(音階的進行での)
- e) 同じ音価の音が並ぶときは、原則として始まりには親指をもちいる。始まりが黒鍵の場合はその限りではない。
- f) 指の省略
- g) 跳躍(オクターブほどの広さ)の時の異なる指による同一音の打鍵ないしは保持。

§3 練習曲についての説明。以下筆者によって項目に分けて要約する。

- ・練習曲の目的は正確な運指を学び、指を強化し、機械的に優れた、完全に正確な演奏をする能力を身につけることである。
- ・ゆっくりのテンポから練習すること。
- ・移調奏をすることの有効性。
- ・練習曲は簡単なものから難しいものへと進むように配列されている。

以下800曲あまりの練習曲が続く。すべての練習曲の検討は紙面の関係上出来ないが原典中の練習曲の区分・構成を以下の表3に示す。

表3 第6版の練習曲の区分・構成

- | |
|---|
| 1) 手のポジション移動のない一声の運指練習 |
| 2) 手のポジション移動を伴う一声の運指練習 |
| a) 指の交差をさせない場合 |
| b) 親指を人差し指、中指、薬指が飛び超える場合。音階練習含む |
| 3) 手のポジション移動のない2声の運指練習 |
| 4) 手のポジション移動を伴う2声の運指練習 |
| 5) 手のポジション移動のない3声の運指練習 |
| 6) 手のポジション移動を伴う3声の運指練習 |
| 7) 手のポジション移動のない4、5声の運指練習 |
| 8) 手のポジション移動を伴う4、5声の運指練習 |
| 9) 両手を交互に用いる場合、両手で音域が重なる場合、両手を交差する場合の運指 |
| a) 両手を交互に用いるときの練習曲 |
| b) 両手で音域が重なり合うときの練習曲 |
| c) 両手が重なる場合の練習曲 |

定義と規則、練習曲の解説が述べられるところは第5版までと共通しているが、第4版までのように運指の必要性を述べることはなく、また第5版のように規



図6 第6版の練習曲の一例

則から主要な修得課題を指示することもない。定義では運指の定義を含めて運指教程の意義を述べ、続いて規則が譜例と共に解説される。ついで、練習曲の説明と練習曲へと導入されてゆく形である。定義と規則の説明を行うがそこには長くともどまらせず、すぐさま運指練習を練習曲でさせる流れとなっている。このような運指教程と練習曲との関係は第4版までと類似しているが、運指パターンで成り立っている練習曲で運指練習させようとする点では第5版の性格に近いといえる。

表3に示した区分ごとに練習曲についての若干の補足説明がなされる。また第5版までの練習曲はある一定の形式・性格を有する楽曲の体裁をしていたが、第6版の練習曲はある特定の運指を練習させるための音型（動機）の繰り返しのパッセージ、ないしはそれを組み合わせて出来た楽節の体裁をとっている（図6参照）。

装飾音も当該練習曲が課題としている運指パターンと関係ある場合のみ出てくる。つまり、第5版までの練習曲では楽曲中の装飾音の運用を練習していたのに対して、第6版の練習曲では装飾音でさえ特定の運指の練習となっている。

おわりに

本稿ではレーラインの鍵盤楽器教本初版から第6版までの運指教程とその関連する部分について考察してきた。当初18世紀のレーラインの教本の運指の習得は、その他の楽曲にまつわる事柄を学ぶことと一体となっていた。しかし、時代が下り改訂を経て19世紀には運指の機械的な習得に特化されていった。1804年出版の

第6版では運指教程が教本の大半を占め、鍵盤楽器教授＝運指パターンの練習という様相を呈するようになった。

このレーラインの教本の変化がどの程度当時の鍵盤楽器教授や当時の鍵盤楽器曲の要求を反映したものなのかは、第7版以降の検討と併せて今後の継続課題としたい。

【注】

- 1) 「レーラインの鍵盤楽器教本研究2—装飾音教程の研究—」『広島大学大学院教育学研究紀要 第二部』（文化教育開発関連領域）第55号 2006, pp.461-467, 2007.3
- 2) 初版のみ運指規則は§5として分離され、次の§は6となっている。
- 3) 誤植で最後の§6は§5になっている。
- 4) C. P. E. Bach Versuch über die wahre Art das Clavier zu spielen. Berlin 1753
- 5) F. W. Marpurg. Anleitung zum Clavierspielen Berlin 1754
- 6) レーラインの教本第1～4版の Vorbericht の部分（ページ数なし）
- 7) レーラインの教本第1～4版の s.51
- 8) レーラインの教本第5版の Vorbericht 部分の2ページ目（ページ数なし）
- 9) 第5版の s.51
- 10) 第6版の s.4

【引用文献】

C. P. E. Bach *Versuch über die wahre Art das Clavier zu spielen*. Berlin 1753

F. W. Marpurg *Anleitung zum Clavierspielen* Berlin 1754

《レーラインの教本》

G. S. Löhlein. *Clavierschule* Leipzig/Züllichau 1765, 1773,1779,1782 (第1～4版)

G. S. Löhlein. *Clavierschule* Leipzig/Züllichau 1791 (bearb. v. J.G.Witthauer) (第5版)

G. S. Löhlein. *Pianoforteschool* Jena 1804 (bearb. v. A. E.Müller) (第6版)

(主任指導教員：千葉潤之介)